福家崇洋著
『満川亀太郎——慷慨の志猶存す』
（ミネルヴァ書房・二〇一六年）

黒川　伊織

本書は、戦間期日本の国家改造運動・アジア解放運動に在野の思想家・社会運動家として圧倒的影響を及ぼした満川亀太郎（一八八八—一九三六）に関するはじめての本格的評伝として刊行された。以下、本書の構成を示しておく。

序　章　国家改造の胎動
第一章　学校騒動
第二章　若き操觚者
第三章　老壮会・猶存社時代
第四章　「第二維新」への階梯
第五章　事変後の寵児
終　章　「惟神」の道へ

このように満川の生涯を描き出した本書の白眉は、満川のアジア解放への営みを、満川の政財界にもひろがるさまざまな人脈とともに、具体的に描き出したところにある。戦後歴史学は、国家主義者によるアジア解放運動を大日本帝国によるアジア侵略に結びつくものとして否定的に評価してきた一方、国際共産主義運動の影響下に「民族・植民地」問題と向き合った社会主義者によるアジア解放運動を、実勢以上に過大に評価してきた。冷戦体制の崩壊から四半世紀が経過し、アジア解放を希った人びとの経験が、イデオロギー的先入観を乗り超えてありのままに評価されはじめたことを、まずは喜びたい。

一　福家崇洋氏の主著にみる研究の意図

三冊目の単著となる本書が刊行されるまで、福家氏の業績が本誌で取り上げられることはなかった。迂闊と言わねばなるまい。そこで、本稿では、主著『戦間期日本の社会思想——「超国家」へのフロンティア』（人文書院、二〇一〇年）に即して福家氏のこれまでの研究の全体像を概観したうえで、本書に立ち戻ることとしたい。主著の構成は次のようになっている。

序　章
第一章　「愛国」への普通選挙——雑誌『第三帝国』における普通選挙請願運動
第二章　普通選挙と人種改善——岡悌治の普通選挙運動に焦点をあてて
第三章　国家への「解放」——第一次世界大戦期にける北原龍雄の思想と運動
第四章　老壮会の「共同」——大正デモクラシー期の改造団体連絡機関

第五章　「ファシズム」の衝撃――一九二〇年代初期日本における
第六章　「情意」と心理革命――高畠素之のイタリア・ファシズム論について
第七章　右派社会運動とクーデター未遂事件――国家社会主義運動と日本主義運動に焦点をあてて
第八章　「現実的革命主義」への途――「ファシズム」と日本主義の狭間で
第九章　国家社会主義・日本主義論争――「社会心理」の行方と「天皇政治」をめぐって
終　章

この構成からはっきりと読み取れるように、福家氏の問題関心の要は、狭義の国家改造運動――右派の運動――にとどまるものではなく、「明治国家」のなかで抑圧されてきた人びとが、国家と時代に向き合いながら、いかに自らの生を生きようとしたかを解明しようとする点にある。福家氏が主著において向き合った戦間期とは、日本史研究の文脈においては、①一九六〇年代後半から七〇年代にかけての「大正デモクラシー」研究、②一九七〇年代半ばの「革新」研究、③一九九〇年代からの総力戦体制研究のそれぞれの文脈から問い直されてきた時代である。

各研究史については福家氏の主著を参照されたいが、すべてに共通する問題意識は、一九二〇年代のデモクラシーと一九三〇年代のファシズムの関係をいかに捉えるのかという点にある。①においてはデモクラシーとファシズムの連続／断絶という問題が正面から議論されるには至らなかったが、①を乗り越えようとする②においては、ファシズム＝悪と一義的に捉えてきた戦後歴史学への疑問から、大正デモクラシー→ファシズム→戦後民主主義の連続性がはじめて提起された。加えて、②がファシズム下における近代化の可能性への注目を促したことで、③では大正デモクラシー・ファシズム・戦後民主主義の連続と断絶を通時的に見通す視点へと発展したとまとめられよう。以上の研究を批判的に継承する福家氏は、②③と同じく大正デモクラシー・ファシズム・戦後民主主義の連続面に着目しつつ、従来の政治史・制度史的研究のなかで等閑視されてきた「個」の思想から、その連続性を再検討しようとしている。

近年では、戦時社会から戦後社会への制度的連続性を明らかにした③の研究の蓄積を踏まえて、貫戦史という視座が提起されている。最近の福家氏の研究は、戦前・戦中・戦後の思想的・人的連続性の解明に重きを置いた貫戦史としての社会運動史・社会思想史の可能性を追求するものへとひろがり続けている（『日本ファシズム論争――大戦前夜の思想家たち』河出ブックス、二〇一二年、「一国社会主義から民主社会主義へ――佐野学・鍋山貞親の戦時と戦後」『文明構造論』九号、二〇一三年、「京都民主戦線についての一試論」『人文学報』二〇一三年など）。

二　戦間期社会運動の目標
――資本主義体制における格差の解消

福家氏の主著を再読して、「右派」の社会運動も「左派」の社会運動も、第一次世界大戦による日本の資本主義的発展にともない生じた、社会における格差の解消を運動の目的としていたという点で、多くの問題意識を共有する運動であったことをあらためて確認した。

社会主義体制の歴史的正統性が失墜した現在、とくに、「左派」社会運動の経験を歴史的にたどる作業には、多くの困難がともなう。しかし、格差の解消と資本主義体制の変革を目標とする限り、「右派」の社会運動と「左派」の社会運動はコインの表裏のように、切っても切り離すことのできない関係にあるのだ。日本共産党最高幹部の佐野学・鍋山貞親の転向（一九三三年）が、資本主義体制変革の道筋を国際共産主義運動指導下の世界革命に求める立場から、天皇制下における一国社会主義の実現へと転じるものであったことが、その証である。福家氏の研究は、「右派」「左派」という先入観を排して、戦間期日本の社会運動・社会思想の展開を、社会運動を実際に担った「個」の側から描き出そうとする意欲的な研究と評価されるものなのである。

以下、福家氏の主著から多くを学びつつ、「右派」「左派」の運動の相似／異同に着目して、戦間期日本の社会運動・社会思想の見取り図を読者に提示しておきたい。その際に鍵となるのは、①一九二〇年前後における同時代認識のあり方と、②一九二〇年代末における資本主義体制の世界的揺らぎである。

①の背景に、第一次世界大戦による日本の急速な資本主義的発展と、一九一七年のロシア革命による史上初の社会主義体制の成立があることは容易に了解されるだろう。日本では、資本主義的発展にともなう階級分化のなかで藩閥・官僚から自立した「資本家」が、一九一九年の原政友会内閣の成立をもって政治的権力を掌握したのだと、「右派」「左派」ともに受け止めていたことが、一九二〇年代の社会運動の方向性を枠づける決定的要因となった。「資本家」による政治的・経済的権力の掌握を重視するこの現状認識からは、眼前の日本社会は「ブルジョア社会」と把握されることになり、「ブルジョア社会」の変革による格差の解消が目標として見定められることになる。「ブルジョア社会」の変革のための最初の行動目標となったのが、福家氏の主著の前半（第一章―第四章）で論じられる普選運動による「ブルジョア」議会への進出であった。一九二五年の普通選挙法公布、そして農民労働党の結党につながるこの動きに、協調して対応した「右派」「左派」は、格差の解消、ひいては労働者の「資本家」からの解放を目指した限りで、統一戦線（United Front）を形成していたのである。

ところが、一九二五年以降、中国国民革命の進展とも連動して「左派」の日本共産党の公然化がはじまると、「右派」「左派」の亀裂は深まっていく。福本和夫の理論に心酔した「左

派」＝公然化した日本共産党が、労働者をはじめ大衆から遊離し孤立していったのに対し、②であげた資本主義体制の揺らぎ――金融恐慌・世界恐慌――により窮乏する大衆が抱いた不満や反感を積極的に回収したのは、「右派」――合法無産政党右派から国家社会主義まで――だった。結果として、資本主義体制の揺らぎは、大衆を「右派」へと惹きつけることになり、その後の「左派」の凋落は、佐野・鍋山の転向を引き金とした「左派」の大量転向に象徴されよう。

そして、この転向の思想的拠り所となったのは、天皇の存在だった。日本共産党の「三二年テーゼ」あるいは講座派理論で「絶対主義的天皇制」が提起された時期に、日本主義の影響を受けた「右派」が「天皇大権」による資本主義体制の変革を掲げたことは、偶然の一致であろうか。政党政治の終焉、満洲事変による大衆の排外主義の高揚とあわせて、「右派」「左派」が天皇を焦点化する過程は、あらためて問われねばならないだろう。

このように見てくると、格差の解消と「資本家」支配からの解放を目指す戦間期の社会運動は、国際共産主義運動の指導に従うか、「天皇大権」を掲げるかという違いはあるものの、いずれも権威主義的な〈上からの変革〉の論理を内包していたように思われる。しかし、福家氏は、「国家からの「個」の解放」の可能性を戦間期の社会運動に見出そうとしている。この可能性がいかに説明されているかは、福家氏の主著を参照されたいが、評者の論じてきた「左派」の運動が「国家からの「個」の解放」を約束するものでなかったことは、一九三〇年代のソ連における大粛清が証明しているはずだ。

三　アジアの変革／帝国日本の変革

『満川亀太郎』が福家氏の研究に占める位置は、戦間期日本の社会運動の方向性を枠づけたアジアとの関わり方を描き出すものと評価されよう。主著が、大正デモクラシーから総力戦体制への思想的連続に重きを置いたために、戦間期東アジアの構造変動――とくに中国革命――と日本の社会運動・社会思想の相互関係が後景に退いてしまっていた点を補完するのが、この『満川亀太郎』なのである。

帝国日本の内包する格差の解消と資本主義体制の変革を目的としつつ、欧米帝国主義による支配からのアジアの「解放」を掲げているという点で、戦間期の「右派」「左派」社会運動の目的は共通していた。欧米帝国主義からの「アジアの解放」を実現する途を、「左派」は「民族・植民地問題」を旗印とする国際共産主義運動の指導に求めたのに対し、「右派」はアジアの被抑圧民族との「団結」による「自彊」に求めた。そして、佐野・鍋山の転向において「日鮮台」による社会主義連邦が構想されたように、「右派」と「左派」の境界線はきわめて曖昧となっていく。その意味でも、『満川亀太郎』二五一頁で言及される「東京国際倶楽部」については、「アジアの解放」を掲

げる「右派」と「左派」が、中国統一の前夜に交錯した事例として、あらためて検証されねばならないことを教えられた。

冷戦体制が崩壊して戦後歴史学の賞味期限が切れたとき、日本近現代史の重要な一翼であったはずの社会運動史研究は打ち棄てられ、社会運動史研究「冬の時代」がやってきた。研究の継承すら危ぶまれる状況に危機感を抱いた田中真人同志社大学人文科学研究所教授（二〇〇七年逝去）が立ち上げた共同研究「近代日本の社会運動家――その書誌的研究」の場で、ともに大学院生であった福家氏と評者は出会った。近年、社会学の立場から社会運動を研究する人びとは増えつつある。しかし、社会運動「史」として、戦後歴史学による研究の蓄積を十全に踏まえ、日本近現代史――そして東アジア近現代史――の研究のなかに社会運動の歴史的経験を位置づけ歴史に学ぶ地道な作業も、なお必要であるはずだ。志を同じくする福家氏とともに研究できる幸運に感謝したい。

（神戸大学国際文化学研究推進センター協力研究員）

永岡崇著
『新宗教と総力戦――教祖以後を生きる』
（名古屋大学出版会・二〇一五年）

近藤　俊太郎

一

本書は、新宗教と総力戦との関係を、中山みきの死後の天理教に照準を合わせて考察した成果である。著者にとって初の単著で、二〇一一年度に大阪大学に提出した博士学位申請論文の一部を再構成したものであるという。まずは本書の構成を紹介しよう。

序　章　新宗教と総力戦
第一章　信仰共同体の危機と再構築――飯降伊蔵と本席－真柱体制
第二章　戦前における中山正善の活動――宗教的世界の構築とその政治的位置について
第三章　「革新」の時代
第四章　宗教経験としてのアジア・太平洋戦争――〈ひのきしん〉の歴史
第五章　宗教のなかの「聖戦」／「聖戦」のなかの宗教――